

心理コーディネーターになるために Vol.10

山下桂永子

☆年度末が繁忙期

年度末の教育相談は忙しい。学校では、先生方が日々の授業をこなして宿題をチェックしながらテストを作り、行事をこなしながら成績をつけて参観や懇談を行っているわけで、それには尊敬できないわけであるが、毎年3月は教育相談にとっても繁忙期である。

年度当初に比べるとケース数は増える一方で減ることはなく、面接、記録、保護者担当と子ども担当の打ち合わせ、電話相談、発送検査に所見作成、学校とのケース会議、時には緊急支援対応も入ってくる。

そして他の自治体がどのようにされているのかわからないが、私の勤める某市教育センターの教育相談では、全てのケースについて、年度末で一旦面接を終えることになっている。3月中旬で定期面談は終了し、そして来年度の面接を継続するかどうかについては、保護者や児童生徒本人にその意向を聞いたうえで、文書を作成し、3月中旬以降に行われる「終了判定会議」で検討されることになる。

教育相談員の取りまとめをしている心理指導員である私の場合、さらに各種会議の出席と相談員への報告書類作成、他機関の連携窓口や指導主事との打ち合わせなど、マネージメントの業務がある。

年度末の教育相談員は、野球で言えば、マネージャーが試合にスタメンで出場するといった感じだろうか。年度末の心理指導員は、企業で言えば一人の社員が来年度の営業をしながら、面接というサービスをフル回転で実施し、引継ぎと決算の文書を作成して株主総会までするという感じだろうか（伝わらないかもしれない）。



日	SUN	月	MON	火	TUE	水	WED	木	THU	金	FRI	土	SAT
27		28		1		2		3		4		5	
6		7		8		9		10		11		12	
13		14		15		16		17		18		19	
20		21		22		23		24		25		26	
27		28		29		30		31		1		2	

←昨年3月のカレンダー。

上旬から中旬は週4日勤務の枠に予定が入りきらない。

下旬は、会議と書類作成に追われる日々。

☆終了判定会議の資料作り

終了判定会議とは、年度末に行われる会議で、通所している保護者および児童生徒について、教育センターでの面接が次年度も継続か、終了か、あるいは他機関へのリファーかなどを決めていくものである。

ここ数年、年度末の終了判定会議にかけるケースは、教育センター全体で100ケースを越えるようになったため、一つ一つにあまり時間をかけられなくなってしまった。事前に各相談員が準備した資料を会議出席者に渡し、一読してもらった上で、1ケースにつき概ね5分から10分程度ですすめなければならないが、それでも1回につき2～3時間会議を行っても2週間はかかる。

実際の検討に時間をかけられなくなったといっても、終了判定会議の資料は、今年度の面接経緯の振り返りや今後の支援方針などを決めていくにあたり重要な資料となるので、準備するにも簡単にはいかない。A4用紙1枚に保護者担当と子ども担当それぞれの面接経緯と来年度の引きつぎ、検討事項を全て詰め込まねばならない。

心理士以外にも教員や言語聴覚士など他職種の方が読むので、どんな人にも伝わるように、うっかり心理用語を使って伝わった気になってはいけない。会議の参加者がこれを読めば、その子どもの人となりや課題、家族関係などを理解することができ、イメージ豊かに建設的な議論ができるような内容にすることが理想であり、一言一句、この言葉で相手にこのイメージが伝わるのか、限られた文字数に細心の注意を払っての文書作成になる。



そしてこの作業を、ケースをこなしながら数十人分（昨年度は30人あまり）作成しなければならないので、年度末は体も頭の中も大忙しである。20年近くやっているが、いまだに年明けぐらいになると終了判定資料作成については気が重くなる。時間との闘いであり、自分の面接力および表現力のなさに打ちひしがれながらも、数回から数十回にわたる1年間の面接経緯を端的に、簡潔に伝えるということが至難の業であるということを実感している。

☆終了を判定することの難しさ

面接を終了するか継続するか、そう簡単に結論はでない。もちろん保護者や生徒児童とは十分に話し合うのだが、そこで折り合いがつかないこともあるし、終了判定会議で担当者の意見が分かれることもあるが、結論は出さなくてははいけない。

基本的には、児童生徒及び保護者の希望に沿うように、そして相談員から支援継続の必要性が説明されれば「では継続で」となるのだが、この数年、私の勤める教育センターの相談件数は右肩上がりが増えており、スクールカウンセラーや福祉、医療などの他機関につなぐことに積極的に取り組んでなお、保護者、児童生徒の継続希望にすべては応えられなくなってきている現状がある。

そのため、終了判定会議では、なぜ教育センターでの面接が必要なのか、他機関にはつなげないのか、緊急度や必要性が高いのかどうかなど、大事な確認ではあるが、なんだかケースの子どもやお母さんたちをふるいにかけるような議論で辛いなあと思うことも多い。

「そもそも、必要がなければ、好き好んでこんな山の上の教育センターになんかわざわざ通いたいとは思わないよねえ」と会議を終えて相談員同士でぼやいたりすることも。そう。センターに通う保護者の方々は、駅からも遠いこんな山の上に、子どもを自転車の後ろに乗せて、急な坂道をこいで、雨の日も風の日も雪の日も月に1~2回決まった曜日、決まった時間に、何回も、時には何年も、通ってきてくださるのだ。

学校や園では相談できなかった事情がある。医療や福祉にも頼れない。教育センターに電話を一本かけることだってハードルが高かったに違いない。ここに来るまでにどんな思いでいたことか。どんな思いで来ているのか。想像すると断れない。というのが正直なところである。

継続的に関わることが少々のおせっかいだったとしても。

